

韋 編

いへん

愛知大学図書館報

No. 32

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

図書館と私

豊橋図書館長 稲垣 不二麿

豊橋図書館長は今期は国際コミュニケーション学部から選出されることになり、小生が担当することとなった。

大学の図書館といえば、三つのことが想い起こされる。第一は、夏目漱石の『三四郎』に、田舎から出て来た三四郎が出会った三つの世界の第二に図書館のことが出ている。そこでは、「片隅から片隅を見渡すと、向うの人の顔がよく分らない程に広い閲覧室がある。梯子を掛けなければ、手が届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。手摺れ、指の垢、で黒くなっている。金文字で光っている。羊皮、牛皮、二百年前の紙、それから凡ての上に積った塵がある。この塵は二三十年かかって漸く積った貴い塵である。静かな月日に打ち勝つ程の静かな塵である」と描かれている。初めて大学の図書館に入った時、『三四郎』のこの箇所を想い起こした。

次に想い出されるのは、学生時代、出身校の図書館に行くと、いつも同じ二人のひとが来ていて、読書しておられた。今日こそ、それらの人びとより先に来ようと思って図書館を訪れてみると、もうその二人は来ておられ、本をひろげておられた。そのお二人は、後年、大きなお仕事をなしとげられた方々で

ある。

もう一つ想い出されるのは、岸本英夫先生が癌におかされた後、東大の図書館長として活躍された記録を読んだことである。先生は、生きることの証を仕事の内に求められた。図書館長としてその改革に挺身されたのも、そういう仕事の一つであった。先生が求められたことは、死蔵の図書をなくすことであった。東大には多くの研究所がある。そこには、各々、多くの図書がある。横の連絡がない。どこにどのような図書があるか、外部の者にはわからない。中央図書館に行けばその全てがわかるようにしたい、というのが先生の志願であった。先生は、ロックフェラー財団の援助を受けてそれを為し遂げられた。今日の図書館の礎をきざされたのである。

学内のどこに、どのような本があるのか。また、自分が探している本がどこにあるのかを容易に検索することができることは、大学付属の図書館の大きな使命であろう。そのことは、本学においても、館員の方々の努力によって為し遂げられつつある。人員の面においても、財政の面においても、大学当局のバック・アップが不可欠である。どのよ



うな図書館に育てていくか、ということは、どのような大学に育てていくか、ということに深く結びついている。両者は別のことではないであろう。

ここで、大学の図書館についてではなく、個人の図書について、少し述べてみたい。私は、個人の図書について、「蔵書」という言い方はいかがなものであろうか、と常づね思っている。図書館については、資料の保持ということで「蔵書」でいいであろうが、個人の図書についてそれでいいのであろうか。以前は蔵書印をつくり、それを押していたが、最近はやめてしまった。本は「蔵」さるべきものではない、と思うようになったからである。「蔵」と言えば、仕舞っておくという印象が深い。本は、使われるべきものであって、仕舞っておくべきものではないのではなかろうか。そうした意味で「蔵書」という言い方はいかがであろうかと言ったのである。

「名号は掛けやぶれ、聖教は読みやぶれ」と言った人がいる。蓮如である。彼の時代、集会がもたれた時、軸に巻かれた名号（本尊）を会場に持って行き、床の間にそれを掛けて集会がもたれた。会が終れば、再び巻きとられ、次の当番の人に託された。集会のたびごとに開げられたり、巻きとられたりしたので、何回も何回もくりかえしている間に「掛けやぶれ」てしまう。それ程、しばしば集会をもて、というのである。彼はまた信者の人びとに朝夕の勤行をすすめた。そのたびごとに勤行本は開かれたり、閉じられたりした。それをくりかえしている間に本は「読みやぶ」られていく。今日でも篤実な信者のお宅には、そのような本が伝えられている。破れるまで読んだ本が何冊あるであろうか。生涯の間に何冊かはそうした読み方をしたいものである。「読破」という言い方がある。『広辞苑』によれば、「(難解な、または大部の書物や書類を) すべて読み通すこ

と」とある。「登破」という言い方もある。その「破」にこめられた意味を考えてみたい。

過日、先進的な試みをしているある市の公立図書館を見学した。市の職員はほんの数人で、図書館の主な業務は専門の業者に委託されている。迅速で効率的な運営が行われているとのことである。図書館の中を説明を受けながら見学させていただいたが、目を見張る思いをしたことが少なくなかった。たしかに便利で効率的ではあろう。しかし、市立図書館として市民の要求をどれだけ汲み上げていくことができるのであろうか、ということについて一抹の不安を感じたことも事実である。市民の図書館として充実していくとはどのようなことであろうか。帰りのバスの中でそうしたことが想われた。

大学における講義は、普通、一学期2単位である。それは90時間の学習活動に対して与えられるものである。教室の中で行われるのは30時間である。それに倍するだけの学習活動（研究）を受講生は一人ひとり自分で行わなければならない。大学の諸施設はそれにふさわしく整えられていなければならない。図書館はそのための重要な施設である。そうした観点からも現状をよく検討し、さらなる充実を求めていかなければならないであろう。

張州雑志の世界

文学部 山田 邦明



地域の歴史や文化を調べるときに、充実した地誌ほどありがたいものはない。筆者はこれまで関東地方、とくに相模や武蔵といった地域の中世のを中心に研究を続けてきたが、その中でいちばん参考にしたのは、江戸幕府によって編纂された『新編相模国風土記稿』と『新編武蔵風土記稿』だった。間宮土信らの幕臣たちによって編纂されたこの希代の地誌は、当時の村ごとにその来歴を述べ、小名（村内にある小地名）や山・川、寺や神社とその由緒・宝物などを網羅的に記し、棟札や古絵図なども概略を図示してふんだんにはめ込んでいる。そしてこうした綿密な記事は、特定の地域にかたよることなく、相武両国一帯にまんべんなく及んでいる。

幕府の膝下であるという特殊事情から、このような地誌が作られたのであろう。列島全体を考えれば、こんなものが存在する地域は限られているといえようが、尾張徳川家が遺した尾張の地誌は、質量ともに注目に値する。尾張藩の地誌編纂事業はかなり早くから始められ、1752年には『張州府志』という地誌が完成しているが、漢文体のこの本にあきたらない思いを抱いた内藤東甫という藩士が、領内の各地を巡って、地域にのこされた情報や史料を書き並べてゆき、これが彼の死後（東甫は1788年に61歳で没）にまとめられて藩主に献上された。『張州雑志』全100巻である。多くの幕臣たちの共同作業で成った『新編相模国風土記稿』・『新編武蔵風土記稿』とは違って、個人の努力の産物であるから、全体的な統一はとれていないが、目にし耳にしたあらゆる情報を貪欲に書き連ね

ており、強い個性を持つ地誌になっている。藩主に献上されたこの書物は、藩の秘庫をひきついで蓬左文庫に所蔵されており、1975年に愛知県郷土資料刊行会によって影印本が刊行されている。ここでは影印本を手がかりにしなが、この書物の内容の一端にふれてみることにするが、膨大な全体を紹介することはできないので、最初の19巻、知多郡にかかわる部分から、面白い記事を抜き出してみたい。



知多半島一帯は古くから知多郡という郡を構成していた。『張州雑志』はこの知多郡から始まるが、西海岸の付け根の西大高村から出発し、海岸を南下して突端の師崎に及び、ここから東海岸を北上して市原村に至る、という具合に、海岸の村々を巡りながら記事を連ねる形をとっている。まずは西海岸の小倉村の記事に注目してみよう。

小倉村 大野荘

府内より行程八里十八町、船路七里十八町、

高千九百石二斗二升二合

元高八百八石八斗四升

小倉村の記事はこのように始まる。この村が大野荘という広いまとまりの中にあることが示され、そのあと府内（名古屋）からの距離（陸路と海路）と村の高が記される。地誌の体裁としては標準的といえようが、このあと村内の川と池、小倉橋という橋のことに及び、さらに「神祠」として小倉天神、「仏院」として蓮台寺と蓮生寺をあげている。

このうち蓮台寺についてはその由来を記すとともに、境内にある地藏堂と、勅使門とよばれる「不明門」（開かずの門）、衣掛松という名の古木、それから門前にある、佐治駿河守という武士の墓と伝えられる塚のことが、絵入で書かれている。これだけでもなかなかよくできた描写といえようが、とくに注意をひくのは、これに続く「土産」の記事である。

土産

青海苔（小倉苔と称す）

里民云う、当邑いにしえ塩浜あり、この所に生まる者、味わい極めて美なりし故にその名を得たり。しかるに近世数度の洪水にこの地類（くず）れ埋まりて変易す。よりて今これ無し。ただただその名のみ残れり。

この村には昔は塩浜があつて、そこでとれた海苔はたいそう美味で、「小倉苔」というブランドだった。ところが最近の洪水で塩浜が埋まってしまう、この海苔もとれなくなった。村人からの聞き取り調査をもとに、いまはなき小倉苔の存在を東甫は記録に書き留めた。洪水による海岸の変貌によって産物が変化するという、とても重要なことが、ここから窺えるわけだが、こうした記事のあとに、東甫は次のような補足を加えている。

今小倉苔と称する者は、大野辺の海中にてこれを採る。故にその味いにしえ当邑の産に及ばず。しかれども今なおその名を賞して小倉苔と号し、大野村の方物とす。

地崩れによって小倉村を追われた海苔は、海辺の大野村に移動し、大野が海苔の産地になった。昔の小倉苔に比べて味は劣っていたが、大野の人々は「小倉苔」という名前はそのままにして、これを名産品にしてしまった。生産地は移っても名前は残る。江戸時代にもブランド名は大事だったのである。



大野から南に20キロメートルほど進んだ野間の地は、江戸時代には柿並村といたつたが、源義朝の終焉の地としてよく知られている。平治の乱で敗れた義朝が、鎌田兵衛正清らを従えてこの地の豪族、長田庄司忠致のもとに寄宿したものの、平家の追及を恐れた長田忠致・景致父子によって浴室で殺されたという、著名な事件の現場である。鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、父の仇の長田父子を誅したのち、この地に大御堂寺を開き、亡父の菩提を弔った。『張州雑志』でもこの寺の記事は詳細で、遺されている縁起や頼朝の画像、義朝の最期を描いた絵巻などをことごとく筆写しており、境内にある義朝と正清の墓も図に描いている。そして長田父子が礎にされた松の木が、長田礎松という名でかつては存在していたという伝承も、東甫はていねいに書き留めているが、こうした記事のあと、産物の蟹の話に移る。

産物

長田蟹 この辺の海浜に小蟹甲に人面の如き紋あるを云う。あるいは云う。蟹譜いふところの鬼蟹・虎蟹はすなわちこれなり。

里老伝えて云う。往昔長田庄司忠致、源頼朝のため誅さる。その靈化してこの蟹となると云々。諸国にもとよりこれあり。みな土俗の事により附会するものなり。

このあたりに生息する、腹の部分が人面のように見える蟹を、当地の人々は「長田蟹」と言っていた。頼朝に殺された長田忠致の亡霊が化して生まれたものだ、という古老の話を書き留めた東甫は、つづいて関係する書物の記事を紹介しながらこの蟹に関する分析を始める。まず「本朝食鑑」という書物にみえる「嶋村蟹」の話にふれ、摂津尼崎天王寺の前の海浜にいる同種の蟹は「嶋村蟹」と呼ばれているが、戦国時代に細川高国がここで敗死したとき、その一党で強力の誉れ高かった嶋村ながしという武士が、敵二人を

脇に挟んで水中に没したことに起因していると記している。さらに「和漢三才図会」もとりあげているが、この書物には嶋村蟹や讃岐八嶋浦の平家蟹のことが記され、また賀越（福井県から石川県にかけて）の海にいる蟹が「長田蟹」と名づけられているとみえる。

各地を巡回して土地の人々からさまざまなことを聞き取り、その結果を書き連ねながら、特に動物や植物などについては、これまでとりあつめた多くの書物の記事を紹介して、それなりに学問的な分析をする、ということをおの編者はよく行っている。長田父子の亡霊が長田蟹という名の産物を生んだこと自体、興味をそそられる——長田忠致は後世まで語り継がれるかなりメジャーな人物だったのだ——が、これに留まらず、『張州雑志』のこの部分を一読すれば、江戸時代に蓄積されていた人面蟹についての知見の概略がわかるしくみになっているのである。

知多半島の海岸の生物に対する観察を重ねた東甫は、巻12の師崎村の箇所、さまざまな海の生き物をまとめて図示し、解説を加えている。長田蟹がきっかけかは定かでないが、蟹にも興味をもっていたとみえ、知多半島の各地でみかけるさまざまな蟹を図入りでコメントしている。野間の少し南、吹越村の海浜には甲羅や腹や足にみな毛が生えた、大きさ二三寸もある「カブト蟹」がいるし、吹越や半島突端の師崎村の海浜では手の長い「猿猴蟹」を見かける。師崎の先の日間賀島には蟬を倒したような格好の「蟬蟹」がいるが、当地の漁師はこれを「カッタイ蟹」と呼んでいる。海に近い山中には、土地の人が「山蟹」と呼ぶ「金銭蟹」がいる。こうした各種の蟹を、絵入で説明しているが、西海岸の付け根、横須賀村あたりの田んぼの中には、全く別種の蟹が住んでいた。東甫はこの名無しの蟹も、きちんと描いて載せている。



知多半島はまさしく漁民の世界であった。

ここを巡回しながら、海で生活する人々の生業について、東甫は貴重な記事を遺してくれた。横須賀村ではかつて領主にキスを献上し、江戸時代になると漁師たちが多数江戸に出ていたこと、東海岸の村々では塩の生産が盛んで、鉄鍋で塩を焼く村と土竈を用いる村に分かれていたことなど、注目すべき記述は数多い。文字資料をあまり残さない漁民たちの生産と生活のありようを考えるうえで、こうした記事はなによりの手がかりとなる。

ただ、知多郡の記事全体を通読する限りでは、東甫の関心の中心は人間よりも生物にあったという印象をぬぐえない。蟹の一覧の話は前述したが、それだけでなく、知多の浜にいるさまざまな貝、海で見かける魚や鳥について、絵入りで解説を加えており、これを一読するだけで、江戸時代の知多の海にどんな生物がいたか、おおよそ知ることができ

る。過去の歴史についてあれこれ詮索しているのは人間だけかもしれないが、人間以外の生き物にも、それぞれの歴史がある。今から900年あまり前、伊勢から舟で伊良湖に渡った西行は、真珠をとったあとのアコヤ貝の殻が積み上げられているさまや、「かつを」という名の魚を釣る舟が並んでいる様子を歌集の中で書きとめている。鱈は今でもこの地域の海に集まってきているし、アコヤ貝については、『張州雑志』にも「知多郡宮崎の浦」にいるとして図入りの解説が加えられている。西行はアコヤ貝の殻を「あこやとるゐがひのから」と表現しているが、そもそもアコヤ貝の名は知多郡阿久比（あくい）の浜（今の半田市北部）で多くとれたことに因むとの説もある。千年のあいだに人間の生活は大きく変貌したが、海の生物たちはどうだったのか。興味は尽きないが、東甫の遺したこの地誌は、こんな好奇心にもきちんと応えてくれるのである。

図書館で一体なんなの？

…もういっそ無い方がいいんじゃない？

法学部 須藤 祐孝



こんなタイトルを掲げたら、何を言ってるんだとハナから相手にされないかもかもしれません。でもこれは、本を書く者、作者、売る者にとっては考えざるをえないことなのです。そして実は、これは今や図書館にとってこそ考えてみななければならないことなのです。

四年前、『だれが「本」を殺すのか』という本（佐野眞一、プレジデント社、2001年）が、新聞や雑誌の書評欄でかなり騒がれました。続編（『～延長戦Part-2』、2002年）も出ました。この両方で図書館のことも大いに論じられています。主に自治体の図書館のことですけれども、その内容は大学の図書館にもあてはまります。図書館に関わっている人ならとうにお読みかとは思います。

この本のいいところは、著者・作者、編集者、出版社、取次、書店、図書館など本に関わる色々な人たちの常識を打ち破ろうとしている点です。それぞれの所で人々が何となく思い込んでいることが「本を殺し」していると言おうとしている点です。図書館についての人々の——図書館の中にいる人、外にいて利用している人、していない人の——常識も無論その中に含まれています。

でもそのいいところが、いいところだとは十分認めますが、私には不満です。一つには今の常識を破ろうとしていながらそれに対して考えられているのが、こうあるべきだという別の、おそらくは著者が本来のものと考えている別の常識なのではないかと感じられるからです。もう一つには、私には本殺しの一番の犯人である可能性が大きいと思え

る読者（＝大学で言えば学生と教職員）の検討があまりに少なすぎるからです。

二つ目については続編（『～延長線～』）で、「一番責任が重いのは」、「本を殺しているのは読者だ」と言われてはいます。しかしすぐ、その読者を「作った」のは先に上げた本の関係者たちの「劣化した負の連鎖」だとされてしまっています。その通りだろうけれど、しかし、と思わずにはおれません。

そもそも、本を必要としない人が年々急速にふえているという状況が根本にあります。必要としても、その時の、瞬間のひまつぶし用ですぐ捨てるものだけ、実用ハウツーものだけという人、単位をとるに必要な教科書だけ、いや試験に持ち込み可の本だけ、それ以外は語学の教科書すら誰かのものをコピーしてすます学生、等々がふえる一方です。これではもう本に関わっている分野の人々の中に本殺しの犯人を捜し、怒っているだけではもうどうにもならないはずです。

本に関わっている人でも、自分が関わる分野のものしか必要ないという人がふえています。受験生時代は受験用の本、学生時代は単位習得用の本、研究者になったらその分野の本だけという大学教師が年々ふえています。つまり筆者・著者も、自分の狭い分野以外の本を必要としなくなっているのです。図書館関係の人も、仕事以外のところでハウツーもの以外の本をどれだけ必要としているのでしょうか？

同時に、本を必要とする人の中で自治体や大学の図書館で借りてすませる人が多くなっています。利用希望の多い本を50冊も買う自治体の図書館もあるとか。宝くじにあたる法といった本まで備えて市民サービスに尽くす所もあるとか。それを先の本の著者は

大いに怒っています。本学の図書館も学外の人にまで貸し出すサービスぶりです。図書館関係の人には利用者が多くなって喜ばしいことなのでしょうか。(あるいは仕事が多くなるばかりで本当はいやなこと、当局ばかりがひとりよがり喜んでることなのでしょうか?)

ともあれ、こういう様々の深刻な状況が、着実に「本を殺し」続けているのです。

さて、本を必要としているわずかな人の中で図書館で無料で借りてすます人が多くなればなるほど、筆者・著者、出版社、書店にはマイナスになります。言うまでもなく、それだけ本が売れないからです。

しかし同時に他面で、固い本、難しい本、大部で高価な本などは図書館にでも買ってもらわなければなかなか個人には買ってもらえません。それを無料で見せたり、貸し出したりされると本はなお売れなくなるから困るけれど、しかしせめて図書館にでも買ってもらわなければごくわずかししか売れないし……でも図書館で無料利用に供されるとますます売れなくなってついには殺されるし……と実にあやうい状態におかれています。

今の公開無料図書館なんかいっそ無い方がいい。たとえば自治体、大学を問わず図書館はすべて館内利用1冊につき100円、貸し出し1冊1日300円といった有料制にしてその料金を著者、出版社に還元すべきだ。コピー全面禁止、コピー機全面撤去とすべきだ。本を書く人、作る人には目を向けず本を無料利用するズルイ人にばかり迎合している図書館は死すべし!……なんて言ったら、〈良識〉ある方々に笑われ軽蔑されることでしょう。

私も本の利用者としては、バカな、と一笑に附したくなります。でも旧来の、そして今のままの図書館でいたら、図書館は本を殺す犯人、重要犯人の一人であり続けます。そしてその結果、やがて自分もやせ細り衰弱していくでしょう。もう常識をこわすことが、常識を越えた発想と行動が必要になって

います。

先の本の中で、著者のインタビューを受けた図書館流通センター (TRC) の社長が言っています。

「図書館人には、本をつくる側が、ああ、もうつくるのイヤになっちゃった、というときに、あなたたち生き残れるんですか、といたい。版元、書店、取次が小さくなっていったときに、それでも図書館だけソヴィエトのようにいばっていられるのか、といたいんです」。(345頁) — 図書館問題の本質をついた鋭い問題提起の言葉です。

今の常識の中にある図書館の中の問題を一つだけ言うなら、選書、取書の在り方です。これをほとんどの図書館は一般常識と今の本流通の仕組み、体制とに頼りきっています。

有名で何となく権威があると世間で思われている出版社の刊行書は、一般書でも専門書でも多くの図書館が収蔵している、雑誌などはどこにでもある。しかし、無名の小出版社のものはどこの図書館にもないということが少なくない。世間の常識に乗った横並びの惰性的思考が、図書館関係者にも非常に強い。

具体的な面では、ほとんどの図書館がその選書、取書を取次が出す「新刊案内」的な目録に頼っていて、取次のルートに乗らない出版社の本には目もくれなくなっています。つまり今の流通体制に乗っかって事務的に仕事をこなしているだけで独自の目、独自の感性を持つなどとはしない。その結果、本に寄生しながら本の流通を支配し本を腐らせている取次大手に日々、無意識に力を貸し、結果として本殺しに協力してしまっています。

以上、本を書くだけでなく、自分の書いた本を自分で編集し自分で出版し(無限社・岡崎)、取次に頼らず、書店にも原則として頼らず、自分で通信販売し、直接読者に届ける試みを続けている者の、図書館に対する正直な思いです。

(2005-10-23)

講演題目：北米に於ける東洋学とその資料の動向

2005年6月15日(水) 豊橋図書館2階自習室

ミシガン大学アジア図書館館長代理 仁木 賢 司



仁木氏の紹介：

上智大学文学部哲学科卒業。1977年渡米。聖ジョーンズ大学でアジア学（中国近代史専攻）の修士取得。プラットインスティテュートで情報学修士取得。コロンビア大学アジア図書館等で勤務。聖ジョーンズ大学でアジアコレクションの長の後、現在ミシガン大学アジア図書館。

CJKとは：

本日当大学図書館に招かれました事を大変名誉に思っております。私はこの場を借りまして、北米に於ける東洋学の簡単な紹介とそれに付随します図書資料の収集、並びに現在及びこれからの東洋学のあり方とその資料の動向について、拙い経験から私見を述べさせていただきます。

近年北米も欧州も東洋、殊に極東＝北東アジアに関わる学問及び資料の事を大学図書館では、CJK Studiesと呼んでいます。この言葉は、1960年代に米国議会図書館で、Chinese, Japanese and Korean language materialsと言う形で、資料収集を一つの独立した単位として始めた時に、使われ始めたと言われていました。今では世界中の図書館で普通に使われております。私は当初何故その様に違った歴史的背景、言語形態を持った国々を一つの単位とするのだろうと不思議に思っておりましたが、徐々にこれは漢字文化圏として考えるべきなんだ、と自分なりに納得致しました。即ちCJKの所有する知的世界は、他の高度な知的世界と肩を並べる程、或は凌駕さしてしまう世界なんだと言う事でしょう。

日本学：

北米でのアジア学、特に日本学は図書収集も含めて東海岸と西海岸に集中して発展しました。ここで忘れてならない事は、日本と敵対する戦争と言う政治的背景を持ちながらも、日本学、日本語を学ぼうとした学徒がい

たと言う事です。その歴史を外して今日の様な日本学の発展はあり得なかったと言えるでしょう。

東海岸で日本学の歴史があるのは、ハーバード大学とコロンビア大学でしょう。この2大学は全然別の方向で研究を進めて来た様に思えます。ハーバードは歴史学、政治学等を中心とし、コロンビアは圧倒的に文学を中心に思想、宗教等にその顕著な発展を示しています。因みに私のコロンビア大学在職中、ドナルド キーン教授、サイデンステッカー教授は共に日本文学の泰斗として教えておられました。彼らの図書館への尽力、研究振りには頭が下がりました。

西海岸ではUCバークレーを中心に日本学は発展しました。西海岸と東海岸の大きな違いは、東海岸が殆ど私立で、西海岸は殆ど公立ということ。この違いは学問の方向を決定する上に大変大きく作用している様に思えます。中西部に位置するミシガン大学は東西の発展と時を同じくしながら、全く独自の立場で日本学を発展させつつあり、日本映画、演劇、アニメ等の世界に非常に顕著な功績を作っています。

コレクション：

この各大学の研究に平行し夫々日本学の資料を収集していますが、UCバークレー、ミシガン、ハーバードそしてコロンビアが規模の大きさを競っているのが現実でしょう。参考の為にミシガン大学アジア図書館の日本語で書かれた研究書は、約29万冊に

なります。中国語は38万冊、韓国語は約2万冊弱となり、全体の重複率は1%以下でしょう。数字だけを追う場合、AAS/CEAL (Association for Asian Studies/Council on East Asian Libraries) の統計を参考にして頂ければ全て明らかになるでしょう。アメリカに於ける東洋学の資料に関する姿勢は、日本人が考える以上に長期に亘るタイムスパンを視野に据えて行われていると言っていいでしょう。元々欧米諸国に於ける東洋学なるものは、中国学であったし、CJKワールドは、絶対的に中国なのです。ですから東洋学の資料を収集している大学図書館は、圧倒的に中国の文献が日本語のそれを上回っております。私自身はCJKを一つの単位として、考えて今迄やって来ました。そういう意味からも、愛知大学の存在は昔から気になっておりました。ですから東亜同文書院関係のマイクロ資料を、オープンコンペで全部所有出来た事は、大きな喜びです。

コンソーシアム：

このコンソーシアムと呼ばれる地域共同利用の図書収集の概念は、年々物価高に喘ぐ昨今、高価な書籍を購入する事が各大学図書館では困難となり、互いに主題分野等を協議して責任分担を決め、その部分のみに集中して高価本を購入、ILLを通して共同利用しようと言う考えから出発しています。その他にも、通信媒体が発達して来た今は、あらゆる事を共同でやろうという動きに発展してきています。私の経験は、米国東部の日本関係資料を、コンソーシアムを形成してやろうと、1980年代半ばからハーバード、イエール、コロンビアそれにプリンストンの4大学が協議した時からのものです。高価本の他に、県史、市史、町史等地方史出版物、主に各地方自治体が出版している書籍を分担収集する事でした。これに依って、各大学は地方史に関しては自館の分担地域を徹底的に収集する事が義務づけられ、効果は出ていると思っています。全国的に広まりを見せ始めたのですが、メディア (Internet等) の発展に伴って基本的概念の変革に迫られているのが現状でしょう。

RLIN (Research Libraries Information Network) と OCLC (Online Computer Library Center)

この2大図書資料のデータベースは皆さん既に聞き及んでいらっしゃるかと推察しています。未だの方は、ウェブに頭文字を入力されますと、全て説明が出て参ります。

私が訓練を受けたのは、RLIN CJKの始まった直後1983年でした。世界で初めてのCJKの出来るキーボードを使って日本語の分類をし始めたときでした。当時全米で、スタンフォード、ミシガン、イエールそしてコロンビア大の4アジア図書館がテスト館として出発しました。それからしばらくして、OCLCがCJKの入力を始めました。

現在では、OCLCの発展がめざましく、全世界に向けて図書館情報網を敷き、メンバー館は2万以上となっています。このRLINとOCLCの大きな違いは、RLINが非営利団体であり、それに対してOCLCは営利事業である事です。営利を追求するOCLCはCJK分類のコンピューター化に遅れをとっていましたが、企業としての努力を重ね、次々と技術的にもサービスのにも進展を重ね、今の巨大な知的産業に成長しました。北米はOCLCを外しては図書館業務は語れないところまであります。LC (米国議会図書館) もこの2大ネットワークと連携を保ち、互いの蓄積された資料情報が何処からでも利用者に検索出来る様になりました。インターネットの発展は知的産業にこそ出来たのではないかと思う程です。

Librarianとして：

私が研究図書館 (research library) に長く席を置いている以上、RLINの検索方法が一番早く的確に資料にたどり着ける事を経験して、未だにWebサーチはRLINの検索方法でやっています。しかし、研究図書は高価であり、常に予算とのせめぎ合いに生きておりますが、こんな資料誰が必要としているかと考えたりする時が多々あります。そう言う時こそRLINの資料収集の原則概念に立ち返り、購入決定をするのが過去20年のプロフェッショナルとしての仕事でした。これから何年現職に留まれるか分かりませんが、米国に30年生きて図書館員として働いて、未だに満足な心持ちになれないのが現状です。愛知大学の様なユニークな大学と懇意になれました事を心より嬉しく感じております。本日このような機会に拙い話をする場を準備して下さいました成瀬さん始め諸関係者の方々に深く御礼申し上げます。

仁木。

※ミシガン大学に所蔵 (北米唯一として)
『東亜同文書院大旅行誌』
『中国調査旅行報告書』

データベースの紹介(法律・判例・企業情報編)



図書館のホームページからたくさんのオンラインデータベースが利用できます。今回は法律・判例・企業情報といった少し専門的なものを紹介します。いずれも国内で定評のあるデータベースばかりですから、みなさんの目的に合わせた利用方法がきっとみつかると思います。検索方法は画面のヘルプを読むことでもわかりやすく、レファレンスカウンターで質問して頂いても構いません。まずは触れてみることから始めましょう。

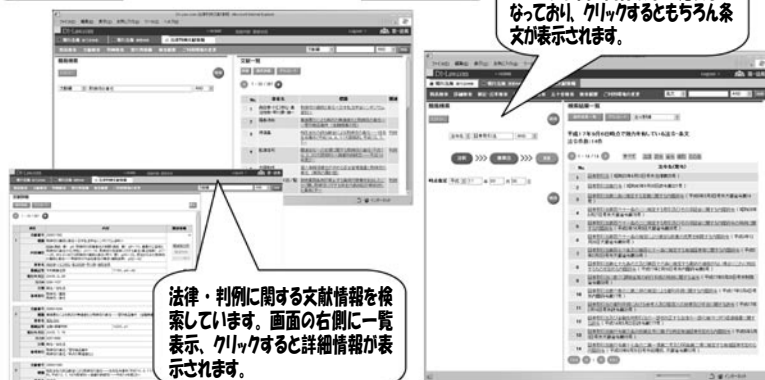
No	データベース名称	簡単な特徴
1	eol DB タワーサービス (有価証券報告書) 有価証券報告書・目論見書・財務データなどが閲覧・印刷・保存できるデータベースです。対象は全国証券取引所およびJASDAQ上場企業のデータとなります。	配信データ形式は各種フォーマットが用意されており、検索結果をパソコンで編集するなど効果的な利用ができます。
2	現行法規 & 法律判例文献情報Web版 ・現行法規は『現行法規総覧』の収録法令のうち日本国憲法、条約、法律(法律扱いの法令を含む)、政令、勅令、省令、規則を収録しています。 ・『法律判例文献情報』は主要な判例の記事情報や法律や判例に関する評釈、文献、書評などが検索できます。	現行法規の履歴検索が利用できる機能がある。※『現行法規履歴検索』から。D1-Law.com 第一法規法情報総合データベースのサービス。
3	LEX/DBインターネット 大審院判決から現在までに公表された判例が全ての法律分野にわたって検索できます。総合検索画面以外に主題毎の検索画面も用意されており、わかりやすい構成になっています。	新着判例検索を週単位で表示するなど更新頻度が充実。収録誌の情報・期間も掲載があり、確実性が強い。

eol DB タワーサービス

検索一覧表示画面です。検索したい企業名を入力し、検索結果一覧からさらに選択していきます。

詳細表示画面からホームページ、株価、財務諸表など様々な情報とリンクされています。ダウンロード機能もあります。

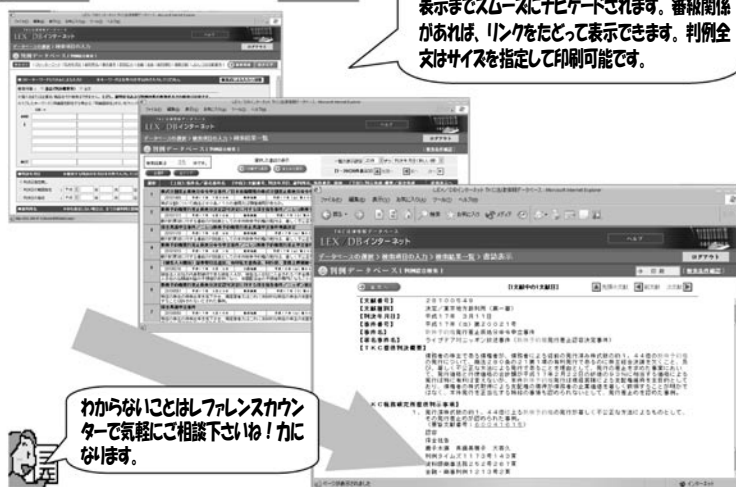
現行法規 & 法律判例文献情報Web版



「現行法規」により法令検索を行っています。右側に関係法令一覧表示となっており、クリックするともちろん条文が表示されます。

法律・判例に関する文献情報を検索しています。画面の右側に一覧表示、クリックすると詳細情報が表示されます。

LEX/DBインターネット



判例検索の画面から一覧表示、判例要旨・全文表示までスムーズにナビゲードされます。審判関係があれば、リンクをたどって表示できます。判例全文はサイズを指定して印刷可能です。

わからないことはフレックスカウンターで気軽にご相談下さいね！力になります。

ABC (自動貸出返却装置) 利用のススメ

図書館カウンター付近にABC装置が設置されているのをご存知でしょうか？これは図書の貸出・返却・延長を利用者が自分で行うことができる装置です。バーコードが印刷された利用者カードをお持ちの方はこの装置を利用できます。図書の貸出の際、書名や返却期限などが印刷されたレシートが発行されますので、忘れずに持って行ってください。



使い方はボタン操作のみです。慣れるととっても便利です。ぜひチャレンジしてみてください。

※図書のバーコード貼付位置や資料（ビデオなど）によっては対応できないものがあります。その際はカウンターで対応させて頂きます。なお従来どおり、カウンターでの貸出・返却も行っておりますので、こちらもご利用ください。

OPAC Webサービス認証が統合されました 情報メディアセンターの認証情報によるログインで利用できます！（学生・院生）

今回のバージョンアップにより、図書館OPAC Webサービスは学生・院生さんが情報メディアセンターを利用する際の認証情報（IDとパスワード）で利用できるようになりました。利用できるサービスは利用状況の照会や図書予約、連絡メールアドレスの更新などです。今後はWebからのサービスをさらに拡充し、他校舎図書館の図書を所属校舎へ取り寄せするサービスも実施予定です。実施時期は、図書館のホームページや掲示板などでご案内していきます。

○利用方法はとってもカンタン！



1. <http://white.aichi-u.ac.jp/opac/> へアクセス

2. 右上の **ログイン** をクリック

- ブラウザのリンクやボタンなどはクリックしないで下さい。同一の要求が複数回送信され正常に処理されないことがあります。

3. ユーザIDとパスワードを入力

- 【注意】ログイン時の認証情報（ユーザIDとパスワード）は情報メディアセンターで登録済のものを利用します。
- ユーザID、パスワードは大文字小文字を区別します。認証がうまくいかないときはキーボードの「Caps Lock」ランプを確認して下さい。
- うまくログインできない場合は図書館カウンターまでお尋ね下さい。



4. 利用できるメニューです

- ログイン後、利用できるメニューが表示されます。
- 貸出・予約に関する情報を照会する場合は、「貸出予約状況照会」をクリックしてください。
- パスワードは表示されません。この画面からパスワードの変更はできません。



- 「ユーザプロフィール更新」で連絡メールアドレスの設定が可能です。

5. 連絡メールアドレスを登録・変更できます

- 図書館からの連絡を受け取るメールアドレスを登録・変更します。
- 初期設定では、情報メディアセンターで発行されるメールアドレスが登録されています。
- 連絡方法に「MAIL」が選択されていない場合、図書館からの連絡メールは配信されませんので、ご注意ください。

6. 登録情報の変更が済んだら、「更新」ボタンをクリックして下さい。



最後に「ログアウト」するのを忘れないで！！

編集・発行

愛知大学図書館

2005年12月20日発行 No. 32

■豊橋図書館 〒441-8522 豊橋市町畑町字町畑 1-1
■名古屋図書館 〒470-0296 西加茂郡三好町黒笹 370
■車道図書館 〒461-8641 名古屋市東区筒井二丁目 10-31

☎(0532) 47-4181
☎(0561) 36-1115
☎(052) 937-8116

URL <http://library.aichi-u.ac.jp>